

私が発見したことをまとめると、三つある。一つは、「欧米人、とりわけフランス人は、二項対立で物事を分析する」ということだった。第二は、「欧米人、とりわけフランス人は、『型』で考える」ということ。第三は、「欧米人、とりわけフランス人は、背伸びして考える」ということだった。そして、この三つの要素が、欧米人の知的で論理的な思考を成り立たせていると気づいたのだ。

■二項対立

そもそも、物事を二つにきっぱり分けて考えることによって、分析ができる。ある要素が存在するか存在しないか、真であるか偽であるか、好ましいか好ましくないかを明確にすることによって、現象を分析できる。「分析」とは、「ある物事を分解して、それを成立させている成分・要素・側面を明らかにすること」(広辞苑)なのであって、要素を分けて思考することを前提にしている。

そればかりではない。顕在・潜在、イエス・ノーを対置することによって、物事を一方的に見ないようになる。ある見方があれば、別の見方がある、賛成意見があれば、反対意見がある、あることを好む人間がいれば、好まない人間もいるということが明確になる。そして、ある意見を考えると、別の意見の存在を前提とし、それを考慮するようになる。

こうして、様々な二項対立によって、人間は分析し、厳密に思考し、自分の意見をもてるようになり、また多様な意見を考えるようになったのだ。

しかも、二項対立を思考の原型にすることによって、自他の区別も明確になる。言い換えれば、自分は自分、他人は他人という個人主義的な意識が強まる。日本人のように、自他の区別を曖昧にして、他人を思いやったり、他人の世界に入り込んだりしない。そして、多様な価値観を認められるようになる。一つの考えだけでなく、別の考え方があり、別の価値観があるという認識をもてるようになる。

二項対立に基づかない思考では、そんなわけにはいかない。

対象と一体となると、対象を客観的に把握できない。観察もできない。二元的に思考しないので、肯定と否定を対置しない。そうすると、議論もできない。他者と同じような意見をもととするばかりで、自己主張もできない。分析も判断もできないことになる。

二項対立的思考が論理の基本であり、それなしには、論理的思考ができるはずがないというのは、否定できない事実なのだ。

(どの道を通るべきか)おしゃべりで有名なイタリア人なのでとりわけあけっぴろげな議論になったのだろうが、あとで考えると、これこそ欧米の人たちの典型的なあり方だろう。知らないとは言わない。物怖じせず話し掛ける。議論をする。間違った結論であっても、断固として主張する。

日本と欧米の大学の授業風景の違いも、よく指摘される。

日本人学生は大学の教室などでも、まず発言しない。外国人講師が質問しても、学生たちは講師と目が合わないようにおとなしくしている。当てられて英語やフランス語をしゃべろうとしても、文法的に正しいかどうか自信がないので、小声で言う。聞き返されると、ますます自信がなくなってしまう。かく言う私もその一人で、外国語を勉強しながら、会話は大の苦手だ。しかも、ときどき活発な学生がいると、日本人は目立ちたがりとしてその人を排斥しようとする。

ところが、日本以外の国の人々、とりわけ欧米の人は、ろくに外国語を話せなくても、めちゃくちゃな文法であっても、何かを言おうとする。

そして、やたらと背伸びをして、自分を知的に見せようとする。先ほど指摘した型思考もその現れだと思うが、誰もが一見、頭のよさそうな話し方をする。

日本人は二項対立で考えないから曖昧になる。イエス・ノーも曖昧で、マルバツでは決められないのが人間社会だと考えている。自分と他者も明確に区別しない。話相手に対して、「わ

れ」という一人称で呼んだり、子どもに対して「ボク」と呼びかけたりするのも、そうした傾向の現れだろう。

しかも、戦後、日本の教育界では、「型」に当てはめることが、個性を壊すとして、何よりも嫌われてきた。作文でも絵でも、どのように書くかは指導されず、「考えていることを自由に書きなさい」「ありのままに書けば、それでよい」とされてきた。そうして、どのように書くかの指導もろくにしないまま、読書感想文を書かせて、本嫌いや作文嫌いを大量に生産してきた。

もちろん、戦前のような、闇雲に暗唱させる教育や、規範を守らせるだけの指導では、独創的な知性は生まれまいだろう。到達点としての、模範としての「型」を重視し、模範に少しでも近づくことを理想としたのでは、どうしても個性軽視になり、同一のものを再生産することになる。だが、私の言う「型」とは、出発点としての、組み立ての基準になる「型」だ。それを目的とするわけではない。このような「型」は決して、個性的な思考の妨げにはならない。

問われていることにきちんと答えることも大事だ。そうすることによって、知的と見られ、論理的に見える。上司に何かを問われたとき、即座に答えることは、知性をアピールするには絶対に必要なことだ。

だが、実を言えば、人に与えられた問題だけを考えているのでは、いつまでたっても独創的な着眼点を見つけることは難しい。与えられた問題について考えるということは、半ば以上を、他者に考えてもらったことを意味する。スタートラインを定められ、それに乗っかって走っているにすぎない。そこから、独創的な発想が生まれることは少ない。

人が当たり前と思っていること、何も気づかずに通り過ぎるようなこと、もう慣れきったために誰も不思議に思わなくなっていることにも、実は、おかしなことがたくさんある。それを疑問に感じ、その理由を考える。そうすれば、これまでとは違った視点から、物事を見ることが出来る。

そうすることによって、独創性をアピールできる。それ以前に、ユニークでおもしろい人と見てもらえる。そして、そこに鋭い指摘があれば、思考力をアピールできる。

新しい発見、新しい発想、それらは、みんながこれまで当たり前と思っていたことを疑問視し、新しい角度から見なおした結果によると言ってもいいはずだ。(コペルニクスの地動説)

物事にノーを突きつけて、「現状はおかしい。改めるべきではないか」というイエス・ノーの二項対立の形にすることが、問題発見能力と言っていいだろう。

人間、どうしても自分の価値観にとらわれやすい。男はいつまでも男の視点で考えてしまう。若者は若者の視点で考えてしまう。だが、ノーの視点を見つけるために、しばらくの間、別の視点を思い浮かべてみるのはどうだろう。

多くの人には都合のよいものであっても、ある特定の人々には害になることなどが見えてきて、新しい視点が手に入る。

■「メモの型」とは?

「メモの型」を用いる場合、私は **3WHAT3W1H** を考えることを勧める。

3WHAT とは、

「それは何か(定義)」「何が起きているか(現象)」「何がその結果起こるか(結果)」だ。

これらの三つの **WHAT** を考えることで、問題点を整理するわけだ。ここ

まででは、まだ問題点を整理しただけだ。このあと、**3W1H** を考えてこそ、独自の視点が見つかり、思考が深まる。

3W とは、

WHY 「なぜそれが起きているのか。それがなぜ好ましくないか、あるいは好ましいか(理由・根拠)」、

WHEN 「いつからそうなのか、それ以前はどうだったか(歴史的状況)」、

WHERE 「どこでそうなのか、ほかの場所ではどうなのか(地理的状況)」。

そして

最後のHとは、HOW「どうやればいいか(対策)」。

何かが会議や雑談で問題になっているとき、メモをとるようにして、これらの項目を口に出してみる。言い換えれば、一つの「型」として頭に入れておいて、決まり文句として用いるのだ。考えるときには、常に「定義・現象・結果・理由(根拠)・歴史的状況・地理的状況・対策」という手順に沿って考えてみる。考えながら、周囲の人と話し、それをヒントにして、自分の考えをまとめる。そうすることで、現状を分析できる。自分の考えもまとめられる。この3WHAT3W1Hは、「型」として以下で説明するように口ぐせにしておくことを勧める。

- ・WHAT1 定義；「そもそも一とは一」
- ・WHAT2 現象；「今、起こっているのは一」「今、問題になっているのは一」
- ・WHAT3 結果；「このままでいくと一」
- ・WHY 理由・根拠；「なぜ、そのようなことが起こっているかという一」「それが、なぜ好ましくないか(好ましいか)という一」
- ・WHEN 歴史的状況；「かつてはどうだったかという一」
- ・WHERE 地理的状況；「ほかの国(地方.組織)はどうかという一」
- ・HOW 対策；「どうすれば改善できるかという一」

現代社会は精神論や道徳では解決できるものではない。すべてを道徳で考えるということは、いかに社会を理解していないか、いかに硬直した考えを周囲に押しつけようとしているかを示している。

たとえ、目上の人であっても、仲間であっても、反論はどしどし行うべきだと私は思う。反論するというのはきわめて建設的な行為だ。人の意見に反論するということは、その意見の不足分を補い、より好ましいものにするということだ。会議などで反論を遠慮していたら、外部から批判されるとすぐに壊れるような意見が合意を得てしまう。

▼先に逃げ道を封じておく

相手が言い逃れをする可能性があるとき、先に逃げ道を封じておくのもうまい方法だ。たとえば、閣僚の汚職を国会議員が追及するとき、初めから、「企業から賄賂をもらったでしょう？」と問い詰めても意味がない。「そんなことは断じてない」などと答えるに決まってそんな場合には、まず疑惑の人物と会った証拠を集めておいて、質問によって、「一度も会ったことがない」と言わせるように仕向ける。そして、そのあとで、会っていた証拠を示す。そうすることで、言い逃れできなくさせる。それと同じ要領で、先に考えられる逃げ道をふさいでおいて、その方向に相手を導くと有効だ。

何の話をしていても、最後には必ず同じことになってしまう人がいる。現在の政治の話をしていても、経済状況を話しても、知り合いの噂話をしていても、最後には、「いやあ、今は平和でありがたいねえ。こんな平和な世界をこれからも守らなくちゃいけないね」などとまとめる。逆に、最後には、「だから、日本は再軍備しなければいけないんだ」と言い出すタイプの人もある。あるいは、「だから、神様が見守ってくれてるのよ」という結論になる人もいる。

これでは、結論はすでに決まっていて、どんな問題も真剣には考えていないということを示すものにほかならない。自分の思想、自分の信念を重視するのは決して悪いことではないが、あらゆることを、自分に都合よく解釈してしまったのでは、思想とも信念とも言えない。考えることを人任せにしているだけだ。

■ゆとり教育の罪

日本の学校教育は、1989年に新しい学習指導要領が示され、一律の知識や技能を子ど

もたちに身につけさせるのではなく、「子どもが自ら考え主体的に判断し、表現したり行動できる資質や能力の育成」をしようという「新しい学力観」が打ち出された。そして、学力の評価も「知識・理解」ではなく「関心・意欲・態度」に重点が移った。こうして、「自ら学ぶ意欲」と「社会に主体的に対応できる能力」を育成する「個性を生かす教育」を重視しようとした。

そして、2002年、それまでの学習指導要領をいっそう進めた「ゆとり教育」と呼ばれる理念に基づく新学習指導要領が実施されるようになった。ゆとりが重視され、総合学習の時間が設けられ、それまでの相対評価から絶対評価へと評価法が変化した。つまりは、より思考力を高め、自主的に思考し、個性を重視する教育が進んできたわけだ。

では、そのような教育の変化によって、日本の教育状況は改善されたか。20年前と比べて、若者は思考力を身につけ、自分の意見を明確に言えるようになったか。

詰め込み教育がなされて、思考力や総合力が軽視されていることを苦々しく思っていた私は、「新しい学力観」が取り入れられたとき、大いに期待を抱いた。もっと思考力を高め、詰め込みではない教育が行われるようになるかもしれないと考えた。しかし、その実態がわかるにつれ、そして、「ゆとり教育」がスタートするにつれ、失望せざるをえなかった。

「新しい学力観」を目指すと言いながら、現在の思考力を育てる教育はますます曖昧になっていると言えるのではなかろうか。

たとえば、総合学習の時間。もちろん多くの先生方が、様々な工夫をしているだろう。みごとに授業をなさっている先生も多いと思う。しかし、私の見聞きするかぎり、多くの小学校、中学校で、ただ体験授業が行われ、「調べ学習」が行われているだけだ。「エイズについて」

「京都の寺院や建物の歴史について」「近くの川の歴史について」といった題が与えられ、図書館やインターネットで調べて、それをまとめるだけの授業が行われている。しかも、そこでは、社会分析の方法も、調査の方法も教えられない。レポートのまとめ方も教えられている様子がない。「差別はやめよう」「自分たちの文化を大事にしよう」「自然を大事にしよう」「川をきれいにしよう」というような道徳的な結論が導き出されるだけの授業しか行われていない。

私の主宰する小論文・作文の通信指導塾で、しばしば生徒や父母にアンケートをとる。その中で、学校での総合学習のあり方、それに対する意見を尋ねてみると、総合学習の時間を「つまらない」「退屈で意味のない時間だ」という答えが返ってくる。それから判断するに、総合学習の時間が思考力や社会性の養成に使われている様子はない。

いや、それだけならまだよい。むしろ、個性重視、生徒の自主性重視を打ち出したために、混乱が深まっている。体罰はもちろん、叱り飛ばすことも強制することも、集団行動を押しつけることもできなくなったために、先生は生徒をコントロールできなくなり、学級崩壊が起きている。そして、思考の原型すらも、教えられなくなっている。

教育というのは宿命的に、生徒にむりやり自主性をもたせるという矛盾を孕んでいる。ほとんどの生徒は、自ら学ぼうとはしない。生徒が自分から学びたくなる気持ちになるのを待っていたら、教育は成り立たない。名人が授業をすれば、クラスの半数以上に学びたい気持ちを掻き立てられるかもしれないが、それでもクラス全員が学びたいという気持ちを自らもつという状況は永遠に訪れないだろう。

自主性をもたせるためには、そして、自分で考える力をつけさせるためには、まずは押しつける必要がある。基本的な考え方のテクニックを示し、それを見よう見まねで繰り返させ、訓練する必要がある。小学校1年生で足し算と引き算を教え、それを繰り返し練習させたからこそ、もっと複雑な数学が解けるようになったのだ。それと同じことで、社会に対する考え方も、まずは考える基本を教える必要がある。むりやり教え込んでこそ、生徒たちは自主性もち、自分で考えるようになる。

だが、「新しい学力観」、そして「ゆとり教育」の理念に基づく学校教育はむしろ、それに反対することばかりしてきたのではなかろうか。

現在の学校教育は、イエス・ノーを明確にすることに抵抗を示す。いろいろな考え方がある、答えは一つではないという口実のもとに、イエス・ノーを明確にすることを「単純な二分法」とみなして嫌う。その結果、様々なものを灰色にし、ぼやけさせる。曖昧であることが人間のしるしと考えると、実は様々な事柄についての判断を保留する。つまりは、曖昧で論点の不明

確な思考を奨励していることになる。

現在の学校教育はまた、個性を大事にするという名目のもと、型どおりに考えることを否定する。絵も読書感想文も、「思ったとおりに書け」というばかりで、テクニックも論理も教えない。いや、教えることを拒否している。何も教えないことを、個性重視と考えているふしがある。

現在の学校教育は、しかも、あいかわらず目立ちたがりを嫌う。先生たちは個性を発揮することが大事だと口にする。だが、それと同時に、目立ちたがることを不純として嫌い、控えめで、みんなと同じでよいと考えている子どもをかわいがる。個性重視ということは、言い換えれば、自分はほかの人とは違うんだという意識を強くもつこと、つまりは、目立ちたがるということにほかならないのだが、それを理解しない。だから、先生たちは、個性的な人間を排除し、真面目で平凡な人間を大量生産してしまう。

■小論文とディベートを授業に

では、このような状況を改めるのに、どうすべきなのか。

私は、本書において説明してきたテクニックを、子どものうちから身につけることがもっとも大事だと考える。現実疑問を抱いて問題点を明確にする。イエス・ノーをはっきりさせる。それを型に基づいて思考し、論理的に会話をし、質問をし、反論をする。そのようなテクニックが身につけていけば、日本中の会社や役所や学校での会議という無駄な時間を、かなり内実のあるものにすることができる。子どもたちは、これからの国際社会で生き抜く力を身につけることができる。

私は、民主主義社会における学校の役割は、一言で言えば、自分で考えるための基礎力を付けることだと考えている。他人の言いなりにならず、政治家や識者の意見をうのみにして情緒的に意見を変えるのではなく、自分の意見をしっかりともち、自然や社会や人間をしっかりと見つめる力を養うのが、学校教育の役割なのだ。

そのためには、小論文やディベートを総合学習に取り入れることを私は提案する。

小論文やディベートは自分の意見を明確にするものだ。この訓練をすることによって、曖昧さが解消される。先にあげたような会議は日本からだんだん少なくなっていくだろう。しかも、自分の主張を裏づけるために、知識を増やそうとする。そうするうちに、読解力もついてくる。関心も、自ら学ぼうとする意欲も生まれてくる。一つの答えではなく、様々な考え方、様々な答えがあることも知ることができる。こうして、だんだんと論理力ばかりか洞察力、つまりは総合力がついてくる。まさしく、「ゆとり教育」が目指していた力を育てることができるのだ。そして、それこそが本書で私が繰り返してきたホンモノの思考力にほかならない。

もっと多くの高校・大学が、小論文を入試科目に加えることをお願いしたい。確かに、小論文は採点しにくい。問題も作りにくい。手間がかかる。受験生の力を的確に把握できて、採点のばらつきも出ないような課題を作るのは容易ではない。だが、小論文を入試科目に加えることで、総合力を判断できる。いや、それ以上に、中学生、高校生に小論文の勉強を課すことができる。そうすれば、飛躍的に日本人の思考力はアップするだろう。

それなのに、自分たちの問題作成技術の欠如を棚にあげて、小論文試験を取りやめる大学が出てきていることは、大学側の怠慢だと私は考える。これほど思考することが求められ、書く力、考える力が求められている時代に、詰め込みの知識を試す問題に戻るのは時代に逆行しているとしか言いようがない。

多くの生徒や学生が、論理的に思考することに慣れ、日常的に政治や人間や社会について議論し、自分の主張をもって、それを裏づけようとする社会が到来したとき、日本は、もっと成熟しているだろう。そして、そのときには、もっと自由でもっとわかりやすい社会になっているだろう。そのような社会にするためにも、今、しっかりした教育をする必要があると、私は考えるのだ。